平成２６年度　課題別人権教育研修講座（Ａ）実施報告

人権・地域教育課

１　日時等　平成２６年７月２２日（火）　奈良県産業会館　５階　大会議室

２　参加者　小学校７７名、中学校４３名、県立学校２４名、私立学校１名、
計　１４５名

３　日　程　13:10～14:00　説明　「人権についての理解を深める教育の推進～『なかまとともに』を活用して～」　人権教育係　指導主事
14:10～16:00　講演　「いじめと差別～同和教育の実践に学ぶ～」
大阪人権博物館　理事長　成山治彦

４　事業実施内容（概要）

(1)　説明「人権についての理解を深める教育の推進～『なかまとともに』を活用して～」

○「人権についての理解を深める教育」をより効果的に進めるためには、個別の視点と普遍の視点の双方向からアプローチすることが重要である。また、「人権についての理解を深める教育」は、人権教育推進の基本方向（４つの側面）の全てにおいて取組を進めることにより、豊かなものになる。そういったことを人権教育学習資料集『なかまとともに』の教材（「新大陸への航海」）を活用して説明した。

(2)　講演「いじめと差別～同和教育の実践に学ぶ～」

○ はじめに

・日本で起こった人権に関わる問題から、人権尊重がスタンダードとして根付いていたはずの日本社会が変わってきたことを感じる。

○ いじめを知る

・いじめ問題は、ずっと続いている。いじめられて命を失った子どもたちの保護者は、つらい思いを持ち続けている。

・いじめは、事実に基づいていないうわさ等から始まることが多い。差別意識や偏見は、事実が明らかになれば覆される。差別意識が社会に充満してしまうのは、その事実を確かめないまま、みんなが信じ込んでいるからである。差別意識を払拭することにつながる、事実かどうかを確かめる力、本当の意味での学力を学校教育の中でつけているのかを振り返りたい。

○ いじめを克服する学校をづくり

・いじめも差別も人の命までをも奪う人権問題であるということを押さえなければ、その解決は難しい。

・いじめの構造は、加害者と被害者、傍観者(中間層)に分けられる。傍観者の４つの層(観衆、見て見ぬふり、関わりたくない、止めたいが躊躇している)の中で、躊躇している子どもたちは良心を痛め、自分を責めている。

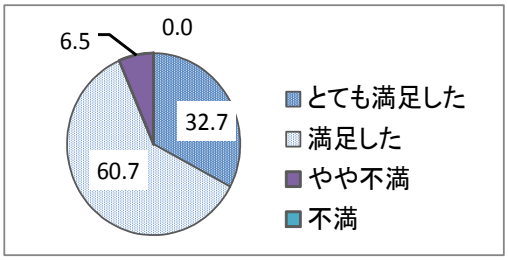
・私たち教員がしなければならないのは、まわりの子を変えること、いじめを許さない集団をつくること、そして、いじめられている子が思いを語れる場を創ることである

・いじめている子どもたちも、何らかの悩みやしんどさを持っていることが多い。その子どもたちの心の痛みや、背景も取りきり、自己実現を図ることが大切である。

○ 地域との連携

・学校や地域社会の在り方が問われている。競争と排除の社会から、共助と包摂の社会へと移行することが大切である。

５　アンケート結果及び参加の感想



・実際に『なかまとともに』が配布されて、その意図するところがわからず、どう活用していいのかわからなかったが、２学期から活用できると思った。

・いじめられたり、差別された子どもの心や気持ちを具体的に挙げられ、改めてその子たちの心に寄り添うことの大切さ、そして、私たちがどのようにしていくべきかを強く話されていた。私たちは、子どもたちの味方でありたいと強く思った。

・成山さんのお話は、現場にいらっしゃるだけにリアルで説得力があった。自分の失敗から学ぶということは、痛いけれど一番大切だと思った。

・成山さんのお話の続き、学校づくり、地域とつながる方向のお話が聞きたかった。

平成２６年度　課題別人権教育研修講座（Ｂ）実施報告

人権・地域教育課

１　日時等　平成２６年７月３１日（木）　いかるがホール　２階　小ホール

２　参加者　小学校６８名、中学校３６名、県立学校２３名、私立学校４名、その他４名
計　１３５名

３　日　程　13:10～14:00　説明　「人権についての理解を深める教育の推進～『なかまとともに』を活用して～」　人権教育係　指導主事
14:10～16:00　講演　「精神障害のある人の理解に向けて」
社会福祉法人萌　副理事長　吉川郁子
地域活動支援センターなっつ　所長　四ヶ所優作
地域活動支援センターなっつ　利用者

４　事業実施内容（概要）

(1)　説明「人権についての理解を深める教育の推進～『なかまとともに』を活用して～」

○「人権についての理解を深める教育」をより効果的に進めるためには、個別の視点と普遍の視点の双方向からアプローチすることが重要である。また、「人権についての理解を深める教育」は、人権教育推進の基本方向（４つの側面）の全てにおいて取組を進めることにより、豊かなものになる。そういったことを人権教育学習資料集『なかまとともに』の教材（「子どもの権利条約」）を活用して説明した。

(2)　講演「精神障害のある人の理解に向けて」

○ 利用者より

・思い込み、妄想、幻聴等の症状を経験。支援センターなっつでは、メンバーとカラオケに行ったり、スポーツをしたりしている。なっつのメンバーはみんな優しい。今、週に５日働いている。なっつも仕事も頑張りたい。

・「あれを買いなさい」等の幻聴は薬を飲むことで治った。しかし、薬の影響で体がしんどくなった。なっつに長く通っているが、今は休憩中と思い、過ごしている。少しずつ体が楽になり、弁当をつくったりしている。

○ 精神疾患は珍しくない病気

・精神疾患により医療機関にかかっている患者数は、近年大幅に増加。平成２３年は約３２０万人。内訳はうつ病、統合失調症、不安障害、認知症などとなっており、近年においては、うつ病や認知症などの著しい増加がみられる。精神疾患は、２０１１年に厚生労働省の「五大疾病」に指定された。

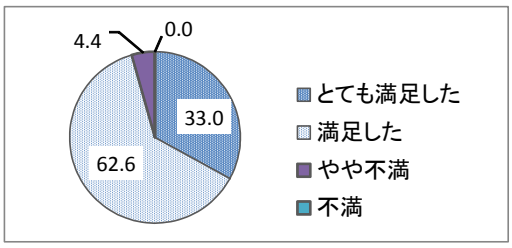
○ 「精神障害」のしんどさ

・病気の症状のしんどさと生活のしづらさを併せ持つ。社会の偏見、物的・人的・制度的な環境因子が大きく影響する。

○ 教職員や児童生徒に伝えたいこと

・精神疾患について正しく理解することが大切。正しい情報を知っておくことで、自分や友人、児童生徒の病気の兆しに気づいた時に、早い段階で周囲に相談できる。

５　アンケート結果及び参加の感想



・当事者の方の話を初めて伺った。子どもたちが直接聞くことができれば、どんなに視野が広がるだろうかと思った。自分らしく生きていく術を見つけていかれる当事者の姿、支えておられる方々の姿を見て、自分ができることを探っていきたいと思う。

・精神障害について、早期発見の難しさ、また、そのことを保護者と話し合う段階での難しさを感じていたので、大きなヒントを得た。

・当事者の方の語りに胸が詰まった。話を伺いながら、浮かぶ子どもや保護者の顔があった。精神障害の理解に向けて、まず自分が向き合い、教職員間の情報共有や関係機関との連携を大切にし、すべての人の幸せ、自己実現のために最良の方法を考えたい。

平成２６年度　課題別人権教育研修講座（Ｃ）実施報告

人権・地域教育課

１　日時等　平成２６年８月１２日（火）　奈良県人権センター　２階　大研修室

２　参加者　小学校６９名、中学校２６名、県立学校１２名、私立学校２名、その他４名
計　１１３名

３　日　程　13:10～14:00　説明　「人権についての理解を深める教育の推進～『なかまとともに』を活用して～」　人権教育係　指導主事
14:10～15:50　講演　「人権教育と道徳教育」
畿央大学教育学部現代教育学科　教授　島恒生

４　事業実施内容（概要）

(1)　説明「人権についての理解を深める教育の推進～『なかまとともに』を活用して～」

○　「人権についての理解を深める教育」をより効果的に進めるためには、個別の視点と普遍の視点の双方向からアプローチすることが重要である。また、「人権についての理解を深める教育」は、人権教育推進の基本方向（４つの側面）の全てにおいて取組を進めることにより、豊かなものになる。そういったことを人権教育学習資料集『なかまとともに』の教材（「ふたりの『ゆう』」）を活用して説明した。

(2)　講演「人権教育と道徳教育」

○　はじめに

・「私事化」する日本社会…
　・自信、居場所、共感の欠如
　・「私」の膨張と「公」の弱体化
　　→自己防衛意識の拡大
　・「開かれた個」と「閉じた個」

・１人の中で価値観が多様化することを目指す教育が「道徳教育」である。思いやりややってあげているといった自己満足で終わるものではなく、他者と自分との違いに目を向け、気づくことを大切にするものである。

・人権教育がしっかり根付くためには道徳的アプローチは必要であるし、道徳教育の中でも人権教育の視点は必要である。

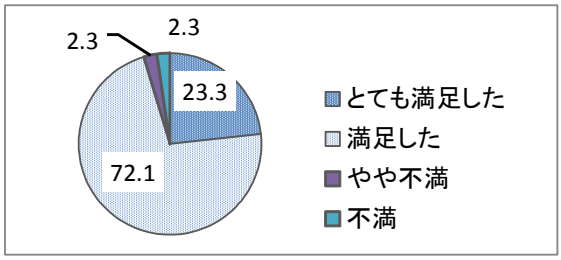
○　人権教育と道徳教育について～「手品師」の授業をめぐって～

・この教材では正直であれ、誠実であれというありきたりの結論でなく、心の中に焦点を当てていくことが必要である。人権教育においても、３つの側面（「知識的側面」「価値的・態度的側面」「技能的側面」）のうち、「価値的・態度的側面」が重視されているが、アクティビティに終わってしまっている感がある。「体験」に「考え合い」を加えることによって学びをより深めていくことが求められる。

○　まとめ

・人権教育と道徳教育のそれぞれの特質を理解して、各学校においてもそれぞれの計画をつなぐことが大切である。

５　アンケート結果及び参加の感想



・人権教育と道徳教育の深いかかわりがよく分かり、整理もついた。

・道徳の授業の展開の難しさ、発問の精選など、まだまだ未熟さを感じている中でこの講義で得られるものは多かった。普段の授業で話しすぎる部分があるので「なるほどね」「どういうこと」等、子どもの考えを引き出していきたい。

・（『なかまとともに』は）挿し絵や文章など、読み手に問いかけ、考えを自然に導き出すものが多く、使いやすいと思った。

・まだまだ固定観念にとらわれている自分自身に気付かされた。実際、子どもたちは、家庭環境の中で培われてきた意識があり、その意識を人と関わることで変革していけるよう、取り組んでいけたらと思った。

・道徳教育全体計画と人権教育全体計画の関連をしっかりと位置づける必要があることがよく分かった。